地理の言葉で語り始めた地理学者たち

——「人文地理学のネオ古典」レキシコン——

水 岡 不二雄

I はじめに

従来、日本でオルタナティブ（ないし批判的）な地理学を目指す者は、大学地理学教室・地理学諸学会といった制度としての地理学に身を置きつつ、経済学・社会学など他の社会科学の「言葉」を借り、それによって伝統的地理学を批判する、という姿勢をとる場合が多かった。だがこれでは、研究の中身が、社会科学の他分野に従属した二番煎じにすぎないことになり、地理という制度の枠組の中で社会科学の理論や概念に乏しい伝統的地理学を批判するには有効であっても、この枠組の外で、地理学と他の社会科学との対等の対話は成立し難い（Mizuoka, 1996）。

21 世紀に向けた地理学の発展にとって、このような「鳥なき里の蝙蝠」でなく、オルタナティブな地理学が、他分野との分業の中で独自の概念を持ち、積極的に社会科学全体に貢献することが重要である。

この点で日本の地理学は、近年の英語圏で新しい地理学が自ら築いてきた空間論の諸概念をもっと学ばなくてはならない。英語圏の地理学者はすでに、この「地理の言葉」で社会を、そして世界を語り始めている。最近英語圏で出る論文や著書が目立つのは、たしかに、ジェンダーやエスニシティ、あるいはフレキシブルな蓄積など現代的なテーマである。だが、こうした現代に緊要な問題という、ある意味

で華々しい研究の側面だけに目を奪われるべきではない。社会学者も経済学者も取り上げるテーマになぜあえて地理学者が取り組むのか、という地道な自己点検が、研究プラクティスの中で絶えず必要である。そして、ここに基軸としての役割を果たしているのが、地理学独自の空間論の諸概念、すなわち「地理の言葉」なのである。

こうした中で、日本地理学会「空間と社会」研究グループは、ひとつのリーディングス（1996）を刊行した。133 ページから成る本リーディングスを編集した本研究グループは、斎藤光格（神戸大）を代表とする日本地理学会「社会（行動）地理学」研究グループを前身とし、1991 年 4 月、高津斌彰（新潟大）を代表に組織された。当初は「社会地理学の理論と課題」作業グループと呼ばれ、1994 年から現在の姿になった。

本研究グループは、英語圏で 1970 年代から急速に進んだポスト計量革命における地理学の再革新、すなわち社会・経済理論を明確に踏まえた社会地理学における社会と空間との連関に関わる諸理論の新しい展開の摂取を一つの課題とし、さらにこの諸理論を日本に普及し、理論・実証の双方で独自に発展させることを目指して活動してきた。この実現のため本研究グループは、1994 年日本地理学会秋季学術大会（名古屋大）においてハーヴェイを基調講演者に招いたシンポジウムを開催し、また 1993 年の経済地理学会第 40 回大会（明治大）では、そのシンポジウムの企画において、中心的な役割を果たした。

キーワード：地理学の独自性、概念化、空間、社会、空間編成

*一橋大学経済学部

1992年3月には、箱根での合宿において、浜谷正人（富山大）の呼びかけ（日本地理学会「社会地理学の理論と課題」作業グループ，1991）により討議し、地理学の空間論に向けた再革新への礎を築いた seminal paper，すなわち「人文地理学のネオ古典」の名に値する論文の邦訳を収めたリーディングスを出版し、日本に新しい世界の学界の動向を紹介すべく、作業開始を合意した。当初、翻訳の対象として多様な文献が提案されたが、結局理論的内容の論文を対象を絞り、今回の刊行となったものである。

すでに日本には、このようなリーディングスの例として、計量革命に関わる基礎的な文献を紹介した野間（1976）や、景観が持つ象徴的意味を論じた論文をあつめ邦訳した千田（1981）がある。これらの所収論文には、日本で今日に至るまで繰り返し引用され、また味読されて、以後の斯学の方角性を設定するに寄与したものも多い。このたび出版された本リーディングスにもまた、こうした役割が期待されている。

本リーディングスに収録されたのは、次の7本の論文である（括弧内は原論文発表年）。

①アン・バットィマー（1969）：「学際的パースペクティブからみた社会空間」（加藤政洋訳）。

②デイヴィッド・ハーヴェイ（1976）：「先進資本主義社会の建造環境をめぐる労働、資本、および階級闘争」（水岡不二雄訳）。

③デイヴィッド・レイ（1977）：「社会地理学と自明視されている世界」（長尾謙吉訳）。

④エドワード・ソジャ（1980）：「社会—空間弁証法」（水内俊雄訳）。

⑤デレク・グレゴリー（1981）：「主体的行為と人文地理学」（大城直樹・潟山健一訳）。

⑥デニス・コスグローヴ（1984）：「ラディカル文化地理学に向けて——理論の諸問題——」（中島弘二訳）。

⑦ナイジェル・スリフト（1983）：「空間と時間における社会的行為の決定について」（遠城昭雄訳）。

この7本の論文はどれも、著者らが比較的若い時期に執筆したものだけに、新しい何かを地理学にもたらそうとする新鮮な息吹が行間にみなぎり、一読して、英語圏の地理学で斯学に独自の空間理論への探求が始まった頃の状況がひしひしと伝わってくる。著者たちは、自ら依って立つ概念への素材を求め、地理学の理論についてはヴィダル・ド・ラ・ブラシュやソールなどフランス地理学の先達をひもとき、また社会理論についてはマルクス、デュルケム、フッサールなどの先哲はもちろん、ルフェーブル、ギデンズ、E. P. トンプソン、マンデル、ショーンバル・ドゥ・ロウ、カステルなど現代の社会理論家の門をたたいて、そこから空間的含意を引き出しつつ、自力で地理学独自の理論を体系化しようとした。

その基礎となった経済・社会理論は、むろん各様である。類型化してみると、マルクス主義を志向したものが②・④・⑥、人文主義を志向したものが①・③、そして前者での「構造主義」と後者における「主体の強調」との間の橋渡しを目指した「構造化理論」を基礎にしたものが⑤・⑦となる。また、これらの論文には、かなり一般的な命題の提示にとどまったものと、こうした一般的認識を踏まえた上で、空間論それ自体をさらに掘り下げたものとの差が認められる。

空間と社会との相関を論じる中で、とくに「空間」が持つ独自の論理の究明に射程を明確に定め、空間論を彫琢したという点では、①と②の貢献が著しい。明晰にまとまっているこの2論文が、本リーディングス所収論文の中で最も早く世に出ていることは驚異で、そこには、バットィマーの人文主義地理学における、またハーヴェイのマルクス主義地理学における、先駆者・理論的リーダーとしての面目が躍如としている。また、①と⑤は、ヴィダルやソールが打ち出した既存の大陸の地理学の社会空間論

の厚みを英語圏の研究者に紹介すると同時に、新しい地理学に独自の空間論に至る過渡期を示すものとなっている。

空間に関わる命題を、所収の7論文から剥ぎ取ってみると、後にはギデンズらに依拠した「主体」と「構造」との関係、あるいはアルチュセールを槍玉にあげての「上部構造」と「土台」との関係をめぐる構造主義批判、⑥のマルクス主義文化論、さらには④のアミンら従属経済論者の理論の紹介といった、経済・社会理論のおさらいが残る。とくに⑦は、*Society and Space* 創刊号に掲載され、フェストシュリフト論文の性格も併せ持つという事情を割り引くとしても、地理学独自の論点がありなく、空間論ですら、社会学者からの借り物が幅を利かせているし、また「地域」と語ったとたんに空間の問題構制が棚上げされ、所与の「地域」という舞台上での主体の行為を扱うだけの単なる社会学に落ちていってしまう、という稚拙さも気になる。もっとも、新しい地理学を理解するためにどの程度の社会理論の基礎が最小限必要かを示す水準点を本論文が示している事実は、日本の読者も十分認識しておく必要がある。

これらの7論文が日本のかつてのマルクス経済地理学とはっきり違うのは、そのどれにも、既存の伝統的地理学に疑問を呈したりそれを解体したりすること自体にレゾン・デートルを見出だす叙述がほとんどないことである。積極説への焦点が必ずしも定まらず、晦渋で論理の運びが必ずしも明快でない場合もあるにせよ、計量地理学がすでに築き上げた堅固な体系にも比肩し得るオルタナティブな地理学理論の構築を目指す著者たちの熱い心の中に、その後のグローバルな地理学界のディスコースにおいて共通の知的通貨となっていく、空間と社会との連関、ないし空間編成論への志向が至る所に芽吹いている。

II 「ネオ古典」のレキシコン

地理学者が得意としてきたフィールドでの実証研究を提示した論文は本リーディングスには一つもなく、全編が抽象的議論で満ちているため、とくに初学者が一度読んだだけでは論文に取り付きにくく感じ、そこから経済・社会の空間編成に関わる論理の全体像をつかみ取ることは難しいかもしれない。

そこで本稿は、本リーディングスに収められた論文全体の中から、空間編成に関する積極的な論点が出されている個所を取り出し（丸数字は上に列挙した論文の番号を示し、コロンの後に邦訳のページを示す）、レイが求めた「空間形態と社会過程の相関的役割」（③：32）、あるいはソジャのいう「社会的諸関係と空間的諸関係の間に見られる本質的に弁証法的な特質」（④：47）を明らかにする空間論共通の命題に従ってまとめて、以下に簡単な「ネオ古典」のレキシコンを作成してみた。各項目のタイトルは空間論の命題であり、その後の記述は、所収論文でこの命題と関連する言明がなされている個所の引用である。訳文は、本リーディングス所収のままとした。

1. 空間はまずもって、幾何学的属性をはらみ、社会と人間主観とを支える客観的・物質的実在である：

社会空間は「その居住者の空間認知という点から均質な地域のモザイク」として考察され、『特別な地点』から発せられる点と線のネットワークによって同定される」（①：4）；「時間と空間とは、……事物の存在の客観的な形態である」（④：48）；「完全にヒューマニスティックな地理学は、……きっと幾何学的な空間概念を含んでいる……。空間に関する諸概念を純粋に主観主義的にイメージすることなどできない」（⑤：68）；「生きられた世界は象徴的に構成されているけれども物質的であるということ

を自覚しなければならず、またその客観性を否定してはならない」(⑥: 83)。

2. 社会ないし人間は、客観的な空間の中に包含されながら空間に対して受動的ではない。空間を主体的に包摂して新たな(人間化された)空間を生産し、自己を再生産してゆく:

「社会的に創られた空間は、大地の生のなかにある本来的な条件を変換させようとする、他の社会的構成体にも比較しうる創造的な構造物である」(④: 48); 「可能論が環境決定論に對置され得ると同じく、ヒューマニズムが、幾何学的な新しい決定論に對置されうる」(⑤: 67); 「社会経済構成体は特定の空間——すなわち景觀——に結び付けられ、そこで生みだされ、そしてそれ自身を再生産してきた」(⑥: 96); 「人間の主体的行為は、社会構造に絶えず問い掛ける時間と空間における振舞の持続的な流れとしてみなされねばならない」(⑦: 107)。

3. 社会・経済諸関係や価値が空間の実体(空間編成・建造環境・景觀)を生産し、生産された空間は、この関係や価値を長期に安定化・再生産してゆく:

「それぞれの社会的専門職集団に共通する特徴的な空間のピラミッドまたはヒエラルキーを識別」できる(①: 5); 「資本主義社会には、一般的にみて、物的景觀……を、生産と再生産の目的におおよそ適合するよう自らの姿に合わせて創造する必然性がある」(②: 12); 「景觀はそれに埋め込まれている主観的意向の指標として生産物の現象学的感覚の中で作用する。……環境における平凡でかつ自明視されている特徴は……局所的な社会的価値をさし示す」(③: 40); 「資本主義的生産様式は、その延命の手段として、地域的あるいは広く空間的な不均等を実際に作りだし、強化し、維持」する(④: 58); 多様な空間概念は「どのような社会形態のなかでも共=存出来る象徴的構造」であるが、これら諸概念の

組合せは「歴史的に限定=拘束されている」(⑤: 68); 「空間はそれ自体、支配階級の文化的コードの受容とそれへの参画を接合し強化する役割を与えられている。景觀は象徴権力を構造化すると同時に象徴権力によって構造化されている」(⑥: 96)。

4. いったん生産された空間は構造(建造環境)として固着化し、ひるがえって生産様式・社会関係を支配するよう反作用して、それをさらに分化させ、変容させ得る:

「社会構成体はその歴史を空間の中に書き込んでゆく。そうした構成体の歴史は、人間的生産の諸様式の遷移を通じて、生み出された諸形態を景觀に重ね焼きしてゆく歴史」である(⑥: 96); 「組織化された空間は、生産の社会関係を単に反映した以上のもの」であり、「生産様式に大きな矛盾を惹起し、それを変えるようなポテンシャルを持っている」(④: 50); 「資本主義の社会関係のもとで、建造環境は人間労働の人工的な構成物となり、この人工的な構成物はいずれひるがえって日常生活を支配する」(②: 19); 「いかなる地域でも社会的活動は、連続的な言説として生じるが、この言説は、機会と制約、現前と不在の弁証法的に結び付けられた配置において、その相互から絶えず生ずる膨大に共有された物質的諸状況に根差している」(⑦: 112); 「空間とその政治的組織とは、社会的諸関係を表徴するが、しかし、後者に反作用もする。……工業化は、かつてはアーバンイズムの形成要因であったが、今日では後者によって促進されている」(④: 46)。

5. 生産様式や経験が、居住と職場との分離を軸とする、有界化され、同時に重層性を持つ上のスケールにおいて連続性をはらむ集合的絶対空間とその建造環境を編成する:

「都市社会空間とは諸空間のヒエラルキーを内包する」(家族的空間→近隣空間→勤務地を取り囲む

経済空間→都市地域の社会空間) (①: 5); 「産業資本主義が労働過程を再編し工場制度をもたらしたことを通じ、仕事の場所と再生産ならびに消費の場所とが強制的に分離された」 (②: 13); 「経験における最も単純なレベルで、空間は近い部分と遠い部分へ、私的なものと公的なもののよう、分割される……. 家は自明視されている世界の中核である」 (③: 41); 「慣習行動は常に時間と空間のなかに位置付けられている。活動が位置づけられる場所は、それ自体で構造を反映している諸制度——家、労働、学校など——の結果である」 (⑦: 107).

6. 主体や社会集団は、行為のため、作用空間ないし位置を充用しなければならない。その充用様式は、特定の社会関係に固有である:

物理的な居住密度と、犯罪・アノミー・緊張とは密接に関係し、「ひとつの社会経済階級に望ましい居住密度の客観的指標」がある (①: 6); 「労働者たちは、生活する場所を必要としている……生産の条件としての土地から労働者たちを排除している私的所有の制度が、生活の条件としての土地からも労働者たちを排除している」 (②: 13); 「生産の社会的関係と社会構成体はその中に、生産のすべてのエージェント……の位置に影響を与え、同時に社会的空間的分業を形成するような基本的な垂直的対水平的構造を内包している」 (④: 61).

7. 上位のスケールにある社会関係の諸分枝は、その下位に複数の領域の生産をもたらす。空間が各分枝を収容する諸領域に仕切られて重層的になると、上位の社会関係における葛藤は空間的に転置される:

「ある集団の願望が彼らの到達できる地平を越えていたとき、……緊張が生まれ、それは空間的行動に影響」する (①: 7); 「資本主義下で組織化された空間構造には、社会階級構造からは分ちがたく

相同的な基本的な関係が存在し、そして各々の構造は生産の一般関係の一部を形成する」 (④: 57); 「新しい、安価な交通の形態を要求することによって、労働者たちは地理的に閉じ込められた畏から逃げ出すことができ、それによって優等地にある家主が独占地帯を獲得する能力を削減することができる」 (②: 15); 「文化地域の性質とスケールは支配的生産様式とともに変化し、それを構造化すると同時にそれによって構造化されている……. 社会経済構成体の概念は、……下属の生産様式の特定の地域への張り付けに対する認識を有する」 (⑥: 88).

8. ある空間スケール内部での社会的葛藤が別の空間スケールを持つ空間的葛藤の関係へと転置されてきた空間的關係は、他の空間スケールにおける社会関係の変容ないし物象化をもたらし得る:

「資本の立場からすれば、個人の競争と地域社会の競争は具合がよい……. このことにより、地代の領有が、領有者みずからの行為に由来するものでなく労働者自身の行為の帰結である、という外観をとることになる」 (②: 28); 「帝国主義的拡張では政治経済の中枢となる諸国での階級対立や経済危機が除去できないことがはっきりした時、都市空間の再組織化への介入の必要性が生じ」た (④: 56).

9. 空間と主体とは自生的に結合し、個性的な「場所」を構成して、主体が社会構造に収斂する空間的接点を作り出す。この場所の構成を、自身に社会関係が埋め込まれた諸実体が媒介することもある:

「生活するのに理想的な場所は、なんらかのアイデンティティを持てる近隣地区である。このアイデンティティは、明確な物的境界……あるいは人々がその環境に愛着を持つような他の特別の目印によって規定される」 (①: 7); 「地位・格式・身分・そして重要性 (自尊心さえも) のシンボルは、格式

ある立地点である特定の資源を支配することにより獲得できる」(②: 26) ; 「場所は常に意味を持っており、それは主体に『とって』のものであり、この意味は……仲間や同時代の人々との新しい世代の行動をかり立てる分離した変数として伝える」(③: 40) ; 「世界の象徴的な領有は、歴史的・地理的に種別的な固有のライフスタイル(生活諸様式)と諸景観とを生みだす」(⑥: 83) ; 「支配的なロカールは、ある地域の相互行為の構造と客観的な構造との間に最も直接的なつながりを与えるが、それはこのロカールが階級の生産と再生産の主要な場であるという理由からである」(⑦: 114)。

10. 個別の場所と自生的に結びついた主体は、既存の自生性の破断に対抗し、この結合を強化しようとする。場所の意識は、同じ意識を持つ異った社会集団間の構造的関係をあいまいにする効果も持ち得る:

「場所の意識……が、希少な公共投資資金をめぐる地域社会間の闘争を引き起こす強い営力として頭をもたげてくる」(②: 27) ; 「多くの現代の草の根運動が土地に意味を復権させることを試みている……。これらすべては、人間的文脈の自由をはぎとる事象への還元という土地の客体化に対する反抗である」(③: 41) ; 「領域的意識が、資本主義的な生産と再生産関係の搾取的性質に基づき、場所への地付き的な情動的な愛着に基づいていないものである時、それは階級意識であるといえる」(④: 61)。

11. 相対空間の属性である距離は隔離と自然の有界性とを作り出すため、より近接した主体の間でより強い社会的相互行為が進み、局地的な社会集団が形成される:

「ある集団が欲求不満や緊張、そしてアノミーを感じずには移動できない、空間の闘がある」(①: 5) ; 「情報分野は、……社会的空間的に近接してい

る情報源を好むように偏向しており、……生活世界における知識は完全も一致も必要としない」「組織が社会空間においてそれらに近接している『仲間』の戦略を模倣している」(③: 39) ; 「どの地域でも特定の諸個人の生涯経路は相互作用が可能であるが、その理由は単に、生涯経路が時間と空間において相互に近接して並立しているからである。しかしながら諸個人が相互作用するかどうかは、生産(それに関連した消費)の特定のパターンに左右され」、「社会における分割は、……時間と空間という最も平凡であるがゆえに重要な力もまた作用する」(⑦: 114, 117)。

12. 互いに異質な社会の要素が距離的に近接し、一つの空間的定在を共有していると、そこに社会的葛藤が発生する:

「空間的に並列した諸集団が空間についてひろく対照をなすような考え方をしていたときには緊張が生まれ、それが空間的行動に影響する(①: 7) ; 「建造環境がもつ、固定し不動であるという性質は、……強い『近隣』効果ないし『外部』効果を必然的に伴わざるをえない。発生する闘争の多くは、外部効果をめぐって発生する」(②: 14)。

13. 広い領域で共同利用される建造環境・空間編成の形態は、多数の人々の生産・生活様式に共通の強制力を及ぼし、既存の様式を安定させる。空間形態の生産は、この目的と密接に関連している:

「資本主義体制は、ますます消費の共同化に向かってきた……。蓄積の利益のために消費をうまく管理する必要があるからである……。建造環境……は、共同で消費される要素をたくさん含んでいる。このような公共財の公共の手による供給は、共同消費の『自然的』形態である」(②: 19) ; 「資本主義の延命は、この空間の占有と生産にはっきりと依存しており、そして官僚制的にコントロールされた消費や、

中心と周辺への分化、日常生活への国家の浸透を通じて達成される」(④: 53) ; 「空間はそれ自体、支配階級の文化的コードの受容とそれへの参画を接合し強化する役割を与えられている。景観は象徴権力を構造化すると同時に象徴権力によって構造化されている」(⑥: 96)。

14. 建造環境や自然環境が内部に持つ諸要素の固着性と空間的な異質性・不均等性によって分派が生産され、社会集団は一層細かく分断される:

「『住民意識』は一般に法的な小『島』を作り上げ、そのなかでしばしば、労働者の一つの分派が、他の分派の犠牲において独占地帯を領有する」(②: 27) ; 「自然世界の地理的多様性は、支配的及び下属的な生産諸様式の歴史的可変性および種別性と結びついて、広範な社会構成体を生み出す。各々の社会経済構成体はそれぞれの生活様式をもち、そこでの象徴的生産の種別性格が特定の景観を生み出す」(⑥: 89) ; 「社会諸集団の各ロカールは、その空間的なひろがりによって分化が一層進み、……同質化の過程によって、さらに断片化されるようになった」(⑦: 115-116)。

15. 主観的空間の到達範囲は、客観的空間と比べて狭く、主観的空間での情報のもとでの人間行動は、完全な合理性を持たない:

「より知っており確実な主観的知識の中核部によって情報地図は特徴づけられており、そこでは知識がだんだん客体や典型となる領域で引き継がれ最終的には無視の領域へと移行する」(③: 39) ; 「階級形成、階級的自覚、階級意識の過程において、参加者たちは、しばしばある特定の地区での自分たち自身の集合的な生活の中で触れる具体的な出来事や経験だけを知覚する」(⑦: 111)。

16. 社会革命は、それを支える空間編成の革命を

通じて生ずる。これにより個々の主体は新しい社会を究極にわがものにできる:

「資本主義の変革は、水平的(周辺対中心)そして垂直的(労働階級対ブルジョア)階級闘争の組み合わせと接合とを通じてのみ、社会と空間の両平面における変革によって起こる」(④: 61) ; 「どんな地理学であろうと、人間が自らの人文的地理の集合的な改変に参加できるような世界を回復させ」なければならない(⑤: 69) ; 「革命的実践として、文化地理学は……空間組織と景観の創発的な諸形態を批判的に検討する……。解放された人間性という社会主義の使命を果たす観点から……果たすべきは、文化的に構成されたわれわれの資本主義世界の諸前提と常識的な諸属性に挑戦するような場所の創造を歓迎し促進することである」(⑥: 96-97)。

III 結 び

以上によって、ともすれば晦渋な所収論文に含まれた「社会-空間研究の原点」を、いくつかの基本命題に整理することができた。

むろん、ここで同じ命題のもとに整理されていても、コンテキストによりおのおのがニュアンスの違いを持つのは当然である。とはいえ注目すべきは、著者が異なり、基礎とする経済・社会理論が異なり、しかも執筆年代に15年の開きがあるにもかかわらず、こうした整理を許すほどの論点の共通性が、この7本の論文を貫いて存在することである。グローバルな地理学の知的共通通貨がいまや何であるのかを、この事実が物語る。今日、これらの地理学者との学問的対話をこうした諸命題を知らずに行うことは、地図なしの登山にも等しい行為であろう。

社会と空間との相関に関わる命題は上記に尽きるものでない。採録された7本の論文が発表されている間に、ルフェーブルの *La Production de l'Espace*、ハーヴェイの *The Limits to Capital* をはじめ、論文にも引用されているサック、トゥアン、

その他の「ネオ古典」としての地位を確立した体系的な書物が何冊も公刊された。空間論についてのより完璧な理解のためには、本リーディングスだけでは十分でない。

上に掲げた諸命題には、相互に矛盾しているものもある。たとえば、建造環境は、その強制力によってすべての主体を均質化させるのだろうか、それともその要素の異質性がますます階級や社会集団を分化させてゆくのだろうか。どちらでもあり、どちらでもない。むしろ、こうした命題相互の矛盾こそ、新たな「社会—空間の弁証法」を生み出す契機である。

また、命題には論争を生んだものもある。たとえば、ソジャのように、空間と社会との相関を「相同性」という一語で片づけてしまってよいのか、階級諸関係がどのように空間諸関係に転置されるか、これこそ、1980年代の初めにピートとN. スミスの間で「空間物神論」をめぐる熱っぽい論争を呼び起こした、空間論の根幹に迫る論点ではなかったか。

さらに、雑誌論文が持つ紙幅の制約もあってか、論点の展開は断片的で、必ずしも体系化されていない場合が多い。ただ「空間を対象とすることが重要」と繰り返すだけに近いような議論もあるし、社会学者の間に時折ある、社会を「空間」と単に言い換えて何か空間について論じているかのような錯覚を十分乗り越えたわけでない記述もある。

とはいえこのようにして、「社会—空間研究の原点」が出そろい、計量革命後の新しい地理学の確立というブレークスルーを達成した後、英語圏の地理学は、次第にポストモダニズム（ハーヴェイ）、産業空間（スコット）、ジェンダー・エスニシティなど、現代経済・社会の個別的テーマに取り組み、その空間編成上の含意を見出だす研究に向かっていった。今日、英語圏の地理学者たちが、これらのテーマを扱った論文・口頭発表、あるいはインフォーマルな会話で何気なく口にする言葉に接すると、その

端々に、初期の諸論文を通じた地道な議論の原点から生まれ育ち、いまや英語圏の地理学者の「身体性」そのものとなった「地理学にオリジナルな言葉」が滲み出てくる。

たとえば、1996年11月2日、経済地理学会関東支部例会にカナダのオードリー・コバヤシ女史（クイーンズ大）が招かれ、戦前のカナダの日系移民をテーマに報告した（Kobayashi, 1997）。報告では、「生産の場（＝職場）と再生産の場（＝居住）」といった言葉が気軽に出入りし、また、カナダと日本が多大の格差（賃金水準で7:1）を持つ異なる経済空間を構成していたことが、カナダという日本から分断された社会空間で長く過ごした日系移民に経済力を与え、両経済空間を連続するモビリティを可能とし、帰国すれば母国日本の社会空間で頂点に立つことで母国のコミュニティへの再同化を容易にしたという、連続性と分断の弁証法がからみあう論理が巧みに組み立てられていた。このような研究のセンスや視点は、おそらく日本の経済地理学者がまだまだ持ち合わせていないものであり、現に、報告後フロアから出たいくつかの質問も、女史の立てた問題の枠組とかみ合っていないかった。

このように、英語圏の地理学者の思想に、本リーディングスにも示された空間編成に関わる認識の背骨がしっかり通っている、ということを忘れてはならない。そもそも、社会学者も経済学者も取り上げる現代の「流行」のテーマを、なぜ地理学者があえて取り組まなくてはならないのか。この点を自らに問うことなしに、エスニシティやジェンダー、スラムといった現代の「流行のテーマ」にだけ目を奪われるとすれば、それは、水俣など局地的な公害被害、水島のような新産都市に代表される地域開発など、当時やはり流行だったテーマに、「地理学徒として」なぜそれに取り組むのかという十分な自問のないまま、地方財政学者などのプラクティスに従属的に追従し続けた、1960年代から1970年代前半まで

の日本のマルクス経済地理学の轍を踏むことになる。

この点で抜本的な方向転換がなされない限り、近年の学際化の中で顕著となってきたような、日本の地理学界を経由せずに、日本の社会諸科学に世界の地理学の新しい成果が直接入り込む状況を、押しとどめることは難しいだろう。日本のオルタナティブな地理学者が根深く身につけてしまった、他分野から学ぶことで自己の伝統的地理学に対する独自性を制度内でのみ主張する、という習慣的行動は、英語圏で社会諸科学に、空間論という「地理の言葉」で影響を及ぼしている現段階になっても、日本で果してどの程度変わったのだろうか。「ネオ古典」が示した地理学独自の諸概念の内包と射程を忘れて、社会と空間に関わる諸命題さえ、社会学・建築学・歴史学などの「言葉」を日本のオルタナティブな地理学者が借り続けるとしたら、それはあまりに悲しい。

まず地理学者が学ぶべきものは、いまやわれわれの内にあるのだ。『人文地理学のネオ古典』に盛られた論文などから、経済社会空間論としての地理学の新しい知的共通通貨とそれがはらむセンスを学び取ること、日本の地理学者たちがもっとこのグローバルな「地理の言葉」で語りあうこと、そして、社会科学の他の分野にその有効性を示し続けること、すでに地理学の「新しい古典」となった本リーディングス所収の論文で、若き日々の著者たちは、何よりこのことを、21世紀に向かう日本の地理学徒た

ちに訴えかけているのである。

本稿は、1997年3月の日本地理学会春季学術大会のシンポジウム「21世紀の地理学への提言」での報告のもととなったものである。まとめるに際し、1996年11月に滋賀県余呉町で行われた日本地理学会「空間と社会」研究グループ秋季合宿における議論を参考とした。本リーディングス発刊に翻訳権取得から印刷・配付まで多大の努力を惜しまれなかった水内俊雄氏（大阪市大）、研究グループ世話役の労を充足以来取って下さっている高津斌彰代表（新潟大）、そして厄介な研究グループの事務を一手に引き受けている小川佳子氏・福田温佳氏（一橋大）に、この場を借りて謝意を表したい。

文 献

- 千田 稔編 (1981) : 『地図のかなたに——論集 景観の思想』, 地人書房, 275p.
- 日本地理学会「空間と社会」研究グループ編 (1996) : 『社会—空間研究の地平——人文地理学のネオ古典を読む——』 大阪市立大学, 132p.
- 日本地理学会「社会地理学の理論と課題」作業グループ (1991) : 通信, No. 1.
- 野間三郎編 (1976) : 『空間の理論』, 古今書院, 275p.
- Kobayashi, A. (1997) : Gender, family, and cultural change among Japanese immigrants to Canada 1890-1930 (Proceedings). *Annals of the Japan Association of Economic Geographers*, 43, 139.
- Mizuoka, F. (1996) : The disciplinary dialectics that has played eternal pendulum swings : spatial theories and disconstructionism in the history of alternative social and economic geography in Japan. *Geographical Review of Japan* 69B, 95-112.

Geographers Awaken to Talk in the Geographers' Languae

Fujio MIZUOKA*

Space and Society, a commission of the Association of Japanese Geographers, published in 1996 a reader containing the following seven seminal papers which had been published in the period from the late 1960s to early 1980s and had provided human geography with a new perspective on the conceptualization of space in society: A. Buttimer (1969), "Social space in an interdisciplinary perspective"; D. Harvey (1976), "Labor, capital and class struggle around the built environment in advanced capitalist societies"; D. Ley (1977), "Social geography and the taken-for-granted world"; E. Soja, "Socio-spatial dialectic"; D. Gregory (1981), "Human agency and human geography"; D. Cosgrove (1984), "Towards a radical cultural geography"; and N. Thrift (1983), "On the determination of social action in space and time".

In order to facilitate the understanding of the spatial conceptions contained in these seminal papers, which are significant for the future development of alternative (or critical) geography in Japan, this paper extracts some quotes from the above papers and lists them under the following basic tenets of spatial conceptions:

1. Space is the objective, material existence which supports society and human subjects.
2. Society and Humans are not passive in space. They positively subsume it to create new (humanized) space and to reproduce themselves.
3. Socioeconomic relations or values produce space, and the spatial entity thus produced supports the stabilization and reproduction of the relations and values for a longer period.
4. Space once produced ossifies itself into structure (the built environment), which reacts to control, differentiate, and transform social relations.
5. Every subject must deploy an expanse of bounded space and a relative position for its action. The form of their deployment is specific to the social relations.
6. A social structure on an upper tier of space produces territories on a lower tier, each of which forms a separate entity in the structure. This stratified configuration of space displaces social relations spatially, and alters the original relations in return.
7. Spatial relations displacing conflict on a particular spatial scale can reify or modify the social relations on different scales.
8. Space and subject fuse together spontaneously to constitute a unique "place," the focal point where subjects converge into a social structure, mediated with all of its embeddedness.
9. The subject attempts to strengthen the embeddedness and resists its disruption. This place con-

sciousness may obscure the consciousness of social relations.

10. The distancing and isolation arising from relative space make the subjects in proximity interact more intensely, giving rise to a localized social group.

11. The spatial coexistence of heterogeneous elements of a society and their mutual sharing of the same built environment create social conflict.

12. The built environment exerts a common coercive power over people to stabilize the modes of production and living over the long term.

13. A social group is fragmented and its fractions formed according to the spatially uneven and fixed components of a spatial configuration and natural landscape.

14. The range of subjective space is smaller than that of the objective; thus rational behavior is not guaranteed since one obtains information imperfectly from subjective space.

15. The modes of production and experience create collective absolute spaces, the most pivotal of which is the separation between the places for living and for work.

16. It is essential for a social revolution to involve a revolution in spatial configuration.

Unfortunately, alternative (critical) geography in Japan still lacks a robust conceptualization of social space and is plagued by the vicious helix, where alternative geographers continue to attempt to assert their academic identity within the institutional confines of geography by drawing upon tenets and theories borrowed from other fields of social science (Mizuoka, 1996). In order for Japanese alternative geographers to relinquish this "dependency" status, it is essential for them to study the seminal papers contained in this reading carefully, and to try to talk more in geographers' language

Key words: uniqueness of geography, conceptualization, space, society, spatial configuration